

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾誠一



学位申請者 南 徹貞

論文名 大江健三郎研究——「死と再生」という主題をめぐって——

## 審査の結果

本論文は戦後文学の代表的な担い手の一人である大江健三郎の 1960 年代から 90 年代にかけての作品を対象として、そこにはらまれている「死と再生」という主題の表現を宗教的、時代的文脈に眼を配りつつ多角的に摘出しようとしたものである。

審査委員会は本学より柴田勝二教授、加藤雄二准教授、米谷匡史教授、学外より近現代文学の専門家であるフェリス女子大学の島村輝教授を迎え、村尾誠一を主査として構成され、2016 年 2 月 10 日に最終試験がおこなわれた。提出者による内容の説明と審査委員との質疑を経て、全会一致で本論文が博士の学位にふさわしいものとして判断された。

## 論文の概要

本論文は序章、終章を含め全 8 章で構成されている。

序章では 60 年代の大江の代表作である『個人的な体験』以降の傾向として、聖書への言及などを含む宗教的要素が増加し、一方では脳に障害を持つ長男光との共生を軸とする私小説的な性格が高まってきていることが指摘されている。この宗教性と私小説性が 60 年代以降の大江作品でどのように交錯し、結合しているかという問題を考えることが論文の主眼であることが明確に示されている。以下具体的な立論である 6 章の内容について略述する。

### 第 1 章『個人的な体験』論—原点としての死と再生

『個人的な体験』を論じたこの章では、この作品が「死と再生」の構図の「原点」として位置づけられている。光の出生をめぐる顛末を素材とする『個人的な体験』は私小説としての性格をもつと同時に、他者と共有しえない「非英雄の悲劇」を描いている点で現代文学としての特徴を明確に示しているとされる。また主人公を苦しめる子殺しの誘惑は、作中に織り込まれたブレイクの詩を媒介として『聖書』の「出エジプト記」における長子殺しの挿話と連携し、また主人公を癒す役柄である火見子の命名が『風土記』を背景としているなど、主人公の回心に焦点化されがちな作品に込められた神話的、宗教的文脈が鋭く指摘され、大江的「死と再生」の構図の特質が示唆されている。

### 第 2 章『万延元年のフットボール』論—時代感覚と想像力の「再生」

この章では『個人的な体験』につづく大江の代表作である『万延元年のフットボール』が想像力の再生という観点から論じられている。「明治百年」の議論がおこなわれている時期に書かれたこの作品は日本の近代を問い直す意味をもっているが、南氏はここに日本人の想像力の枯渇とその再生への願いが込められているという見方を示している。それは四国の村に帰郷した鷹四が、朝鮮人経営者によるスーパーマーケットを襲撃するという展開に見られるもので、そこに他者的存在に対する想像力を封印して暴力に赴いた日本の近代の姿が垣間見られるという。韓国人としての論者の視点が盛り込まれつつ、鋭い批評性が発揮された章となっている。

### 第3章『洪水は我が魂に及び』論—過渡期の「喪失」と「宗教的経験」

この章では『洪水は我が魂に及び』が論じられているが、この作品は表題からもうかがわれるように宗教的な文脈が明瞭で、終末をみずから引き寄せるかのように障害児とともに塔にこもって暮らす主人公と、彼らと共生することになる「自由航海団」という少年たちの交わりのなかに、狂気と信仰が交錯する様が浮かび上がっているとされる。また樹木と鯨の魂の代理人たろうとする主人公にはアニミズム的世界への志向が強くあり、行き詰まりを迎えつつある文明世界を自然との交歓によって「再生」しようとするヴィジョンが強く打ち出されている。表題をはじめとして聖書への言及がちりばめられている点で、西洋世界への連関が捉えられる一方で、古代的世界への繋がりをもつ「森の思想」への導入がなされた作品として位置づけられている。

### 第4章『新しい人よ眼ざめよ』論—「新時代」の死と詩

この章では成長した長男の光との共生を主題的に描いた『新しい人よ眼ざめよ』が論じられる。光をはじめとする自身の家族を素材としている点で私小説的な性格の色濃い連作小説集だが、ここでも表題に採られているウィリアム・ブレイクの詩を媒介として宗教的、神話的な文脈が導き入れられており、また「新しい人」によって担われる「新時代（ニュー・エイジ）」がブレイクの生きた18、9世紀の産業革命時を指すとともに、1960年代からアメリカで始まった宗教運動としての「ニュー・エイジ」をも示唆する多重性がはらまれているという。この「ニュー・エイジ」はさらに「核の新時代」と重なっていくもので、障害を持つ子供が自立に向かおうとする姿に、この時代に対峙しようとする大江の姿勢が打ち出されているとされる。論文全体の主題である大江文学における宗教性・神話性と私小説性の融合がもっとも明瞭に捉えられた章であるといえよう。

### 第5章『人生の親戚』論—現代の「悲劇の表現者」

この章で論じられている『人生の親戚』は大江自身の生活と直接つながる私小説性は乏しいが、身体と知能にそれぞれ障害を持つ兄弟が同時に自殺するという悲劇に見舞われた女性まり恵の軌跡を描く作品の設定はやはり作者のそれを踏まえており、性欲も含めた人生への肯定的な姿勢によって極限的な「悲しみ」を乗り越えようとするまり恵の姿に大江的な宗教への志向が込められている。またこの作品では韓国の詩人金芝河が投獄された事件に際して、語り手が韓国独裁政権に抗議するストライキに参加する場面が現れているが、

この詩人の「受難」が作品に盛り込まれたバッハのヨハネ受難曲と共鳴しつつ、主人公まり恵の「受難」と連携していくというのは興味深い視点であろう。

#### 第6章『治療塔』論—近未来の「危険の感覚」

本論の最後のこの章では、核で汚染された「古い地球」を棄てて「新しい地球」に移住した人々が、一層苛酷な環境であることが分かったその「新しい地球」を離れて十年後に帰還してくるといふ、SFの体裁をとって展開する『治療塔』が論じられている。ここでは「古い地球」からの離脱と帰還という構図によって「死と再生」の主題が明瞭に打ち出されており、しかも「3・11」を連想させる内容はその後の現代世界の帰趨を先取りする意味をもっている。そして汚染された地球で子供を出産することを決意する語り手のリッチャンの姿に、「再生」を強く願う作者の宗教的な姿勢が現れているとされる。

以上の6章を受け、終章では、これまでの論を概括する形で、大江健三郎における「死と再生」の主題と私小説性との連関が捉え直されている。大江においてこの二者が強く重なるのは、やはり長男の光を契機としており、『個人的な体験』に始まる光との共生を動機とする作品群において、社会における弱者にほかならない長男の成長を辿ることが「死と再生」という主題を必然的に呼び込み、それが現代世界の危機に対する大江の姿勢を明確化していくのだとされる。

#### 論文の評価

本論文は1950年代から現在に至るまで、膨大な作品を残してきた大江健三郎の表現活動に対して、「死と再生」という主題による括りを与えることでその輪郭の一面を浮かび上がらせようとしたものである。論の対象とされている『個人的な体験』から『治療塔』に至る期間に生み出された作品群は、確かに大江の作家としての個性を刻みつけた代表作といえるもので、それらを通して「死と再生」という主題的な構図を前景化させる試みは十分な説得力をもって実現されており、単に作品論を各論的に連ねただけの構成に終わっていない。また論の主題に叶う箇所だけを恣意的につまみ食いすることなく、それによって各作品の要諦を捉えている手腕も見事であり、加えてその論を展開していく文体も留学生のものとは思えないほど流麗で洗練されており、南氏の日本語能力の高さを看取させるものであった。

本論文は端的に言えば大江文学の宗教性を追う内容となっているが、聖書や神話への言及をちりばめながらも、特定の宗教によらない宗教性を表現することを志向する大江文学を把握する視点として、私小説性という問題を持ってきたところに論者の個性が見られる。一般に私小説は作者の身辺的な日常や心境にのみ眼を注ごうとする形式として見なされがちだが、障害を持った長男との共生という私生活上の主題を核として、現代世界を覆っている様々な危機に立ち向かっていこうとする大江の表現者・思想家としての個性がむしろこの私小説性のなかに立ち現れており、その特質を捉えるには有効な方法として評価される。

反面審査委員より様々な問題点も指摘された。まず「死と再生」という主題で大江文学を括り取ろうとする着想はよいとしても、この主題は『治療塔』以降の『燃え上がる緑の木』『取り替え子』などにも見られるものであり、なぜ『治療塔』までで論が終えられているのかが明瞭ではない。またこの主題の原点にあるというべきものは大江が学生時代に参加した砂川基地闘争であり、そこでの挫折の経験を踏まえつつ表現者として歩み始めた軌跡が「死と再生」に相当するとも見られる。『奇妙な仕事』『死者の奢り』といった初期作品にも「死と再生」の胚珠となる主題性がはらまれているはずで、そこに眼を向けてもよかつたのではないかという声が出された。

また個々の内容に差のある諸作品を通して「死と再生」主題の抽出が行われているために、一つ一つの作品論的な掘り下げにはやや物足りなさを感じさせ、一方では作品の宗教性が追われているに於いては、引用された聖書等のテキストに対する把握が十分とはいえないという点が指摘された。個々の作品を論じながらそれらを貫く思想性、宗教性を探求するという方向が取られているために、両者のバランスを取る難しさがあり、それを克服することに努力が払われていることは十分理解されながらも、達成にはやや不満が残された面があることは否定しがたいとする意見もあった。

これらの指摘、批判に対して南氏は誠実に応答し、上記の点についても今後の課題として取り組んでいく旨が示された。全体としては質の高い日本語で書かれた完成度の高い論文であり、最終試験での応答を踏まえた上で、審査委員会は全会一致で、南氏の提出論文を博士の学位にふさわしいものとして判断した。